

# 「反転授業」を 目指す

教育創造研究センター所長 高階玲治

第20回

## 「反転授業」とは何か

### 授業の未来形への予測

最近「反転授業」という言葉を聞くようになった。特に佐賀県武雄市で小・中学生全員に1台ずつタブレットPCを配り、家庭で学習したことについて、授業で話し合いをするという新たな授業スタイルを実施することで、にわかに

脚光を浴びることになった(本紙10月14日付に掲載記事)。

この「反転授業(Flipped Classroom)」はスタンフォード大学

医学部のプロバー教授の提案のようであるが、講義内容をオンライン教材化して自宅などで予習し、それで学んだ学生が授業では対話型の活動を行うというもので、学生評価が大幅に向上したとされる。

小・中学校で実施する場合、高等教育とは異なった難しさはあるが、基本的に同一なのは、授業で

行う教師の説明的な内容をタブレットPCに組み入れて学習者に与え、事前に予習できることである。

これまでの授業は、教師主導型の一言形態が多く、子ども同士の話し合いや相互交流が十分に行われないで来た。「反転授業」では教師の説明的部分を事前に家庭学習してきているから、授業では直ちに子ども同士の話し合いをスタートできる。子ども主体の学習展開が可能になって、活用型授業がやりやすくなる。

つまり、従来型の教師の説明的心の授業から、子どもがタブレットPCを活用して学習内容を家で予習的に学び、授業が子ども主体の話し合いなどへ変わるという。まさに「反転授業」なのである。

ただ前提として、すべての子どもが課題について予習してこることが必要である。家庭の協力による学習習慣が形成されていないと、予習してきた一部の子どものみ偏った授業に陥りかねない。

また復習は家庭学習でもかなり実施できるが、まだ習っていない学習内容を予習することは通常では難しい。理解が遅れがちな子どもは大きな負担になる。

教師がタブレットPCに示す予習課題を十分に吟味して与えないと、家庭学習をしない子どもが生まれそうである。教師自身が予習

課題の出し方にかかり精進する必要がある。

授業では「話し合い」を主に引き、教師主導はできるだけ避けるようになると考えるが、子どもたちが主体的に課題を見だし、協力して学習を推進できる力の形成は容易に育つものではない。教師の効果的な働きかけが必要である。そうした課題が潜む「反転授業」であるが、タブレットPCを有効に生かせば未来形の学習形態になりうる可能性がある。

もともと私は、家庭学習と授業とのリンクを提唱してきた。とかく家庭学習は「復習」のみで明日の授業にあまり関わりがなかったが、「予習」をすることで、授業にリンクできれば学習態度も学力も向上することは確かである。そうした意味で「反転学習」の成果に大いに期待したいと考える。